韓　金江(岐阜経済大学経営学部教授)

中国国有工作機械企業の
企業改革と技術競争力の向上
－北京北一機床股份有限公司の事例を中心に－

立命館国際地域研究　No.43
pp.31～49　2016.3.

1. 本論文の主題

中国の工作機械産業を企業改革と技術競争力の面から詳細に分析が行われた論考である。北京北一機床股份有限公司（以下,「北一機床」と略す）の発展事例を通した検討が行われ，同産業と「国進民退」現象（中国では2000年代に入ってから，国有経済の増強と民営経済の縮小傾向が見られる）がどのようにリンクしているのかが論じられている。

2. 本論文の目次

はじめに
Ⅰ．中国の工作機械産業
　1. 工作機械産業の現状
　2. 工作機械業界の状況
Ⅱ．北一機床の企業改革
　1. 1980年代の企業経営の変化
　2. 1990年代の企業改革
　3. 2000年以降の改革の進展
Ⅲ．改革開放後の技術発展
　1. 1980年代の取り組み
　2. 1990年代の技術競争力の向上
　3. 2000年以降の技術戦略
むすびに

3. 各章の主要内容

「はじめに」では，論文の目的が提示される。代表的な国有企業である北一機床を取り上げる理由を述べた上で，本論でこれまでの同産業の成長戦略の特徴を明らかにし，それにより論旨が明確になることを述べている。

「Ⅰ．中国の工作機械産業」では,工作機械市場全体の現状，特に，2001年のWTO加盟以降の業界の構造変化や生産・販売額について時系列の分析が行われている。

「Ⅱ．北一機床の企業改革」では,同社の1980年代，1990年代，2000年代以降の状況についてそれぞれの特徴を当時の中国政府の政策と同社の企業改革がどのように行われたかについて分析が行われている。

「Ⅲ．改革開放後の技術発展」では,技術発展の部分に焦点を当て，目次にあるように各年代別に行われた取り組みの主要部分について論じている。特に外資との連携状況について具体的な記述が多く，また，主力製品の変化についても関係資料を図表化するなど興味深い内容となっている。

「むすびに」では，これまでのまとめとして，北一機床の技術競争力向上の要因を4点指摘しており，そのすべてが国有企業であったことにより実現した点にある，と評価している。また,同産業の現状として，量的な拡大発展の状況ではなく,「質的な発展段階」にあることを指摘し,それはこれまでの国有企業における経営資源の蓄積によるものであることを論じている。よって，将来の同産業発展のためには，質的な「国進民退」の状況が一層明確になってくる，と結論付ける。

４．本論文の貢献

「国進民退」現象に関する先行研究では,いわゆる伝統産業と呼ばれるエネルギーや鉄鋼と

いった国有企業の支配が比較的顕著な産業分野を取り上げた例が多い。本論文で取り上げられた工作機械産業もその国有支配が顕著な例ではあるが，同産業は近年の企業改革に関わる学術研究では大きく扱われなかった分野であり，筆者が研究を進めた点は大きな貢献があったと言える。また，同産業の特徴として，金属部品の加工設備を提供する上で，機械製造業などにとって極めて重要な役割であり，中国経済全体の「国進民退」現象と産業内での特徴をわかりやすく論じた点において高く評価できる。

また，本現象で指摘される１つである，同一産業内で中国の国有企業による寡占体制が敷かれてしまう点があるが，著者も指摘しているように工作機械工業においては，規模の小さい国有企業はイノベーションの面において常にリードする立場を保たねばならない。その点についても論考を通して，これまでの企業改革と技術競争力の面からその必要性を分かりやすく論じられていることも大きな特徴である。

（桃山学院大学共通教育機構講師　登り山和希）